

動物画による児童の性格分析の試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23537

動物画による児童の性格分析の試み

多田 建治 ・ 今村夏井子* ・ 折橋 佳子**

問 題

児童画の見方は、単に美的な観点からのみ評価して、稚拙なもの、無価値なものとして片づけられるものではない。心理学者は児童画の中に、知的な発達⁽³⁾の程度や、情意的側面、コンプレックスや喜怒哀楽の言語化されない感情、心身の障害などの前意識的な表現を見出すものである。児童画によって知的な発達の程度を体系的に把握する方法としては、グッドイナフにより考案され、本邦では、桐原、小林らにより標準化された「人物画による知能検査法」がある。児童画の別の心理学的見方としては、絵画を情意の表出したものとして見ていく方法である。これは、無意識の、或は、前意識の、または、意識しているが言語的に表現し難いような情意を絵画の中に投影しているとみる方法である。この投影法としての児童画のあり方は、まだ比較的新しく、これには精神分析の発達が大きく寄与している。

投影法として、一種の性格検査として意味をもつ児童画のかなり体系化されたものとしては、コピッツによる「人物画による性格分析」や、コッホの「樹木画」、ハルゼの「家族画」バックの「H, T, P, テスト」、レビーによる「動物画」などがある。また、ワルテックによる「描画完成テスト」などもある。これらのテストは、「何か描く課題を与えて、それを描かせたもの」つまり、課題画なのであるが、こうしたものの他に、本邦での、浅利⁽¹⁾による、子供

に好きなように自由画を描かせて、そこに使用された色彩の位置から、子供の心理状態を推測するという、浅利自由想画法というのがある。

人物画や樹木画の分析は、かなり多くの人によって研究され、心理学会等で発表されているが、レヴィーによる「動物画」については、確実な資料は殆んどない。それにもかかわらず、動物画は児童にとって、人物の次に多く描かれるものであると、カール・ビューラーは述べている。日本の子供の場合は、動物は欧米の子供ほど多く描かれるとは思わないと湯川⁽¹⁷⁾は述べているが、動物というものが児童にとっては、身近な存在であることは否めない。何を反応してもよいロールシャッハ・テストでは、動物が最も多く反応されるし、心理療法の一環として用いている Sand Play や、夢分析の中で、動物はしばしば登場するものである。小さなペットの動物や、ぬいぐるみは、子供達の大切な遊び相手であるし、動物園は子供達で賑っている。

ロールシャッハテストに現われる動物イメージは、子供の場合は、家族内の布置を表すものとしてとらえられている。大きな動物は両親を表し、小さな動物は子供（自分や兄弟）を表している。各々の動物に与えられている、文化的ステレオタイプとしての性格特徴が、それぞれの家族の成員の性格特徴として解釈出来るのである。特別の動物の内容は、子供が彼の両親や兄弟をいかに見ているか、どんな関係をもっているかを知る手がかりとなる⁽⁹⁾。例えば、「狐」

* 石川県立養護学校

** 明和養護学校愛育分校

のイメージは、「ずるい」とか「賢い」とかいった文化的ステレオタイプのイメージがある。自分よりも賢く、いつもうまくやっている兄弟に対し劣等感をもっている子供は、「狐」の反応により、自分の兄弟との関係からくるコンプレックスを投影するかもしれないわけである。世界中の数多くの民話や寓話の中で、「ライオン」は百獣の王として、「キング」、「権威の座」のイメージと結びついたり、「狼」は、「悪漢」としてのイメージと結びつき易い。こうした考え方は、精神分析的解釈として、あまり一義的な解釈は危険であるが、一応納得のいくものである。

また、IMQ (Image Question) のように、家族の成員の各々を動物にたとえさせて、被験者の家族の成員に対する見方を調べるテストもある。ベラックによる C.A.T. は、動物の親子の描いてある絵を見せて物語を作らせて、その中から被験者の対人関係や情緒的な問題を調べるものである。そして、描画に於ても、家族画の代わりに、動物の親子を描いて、家族の人間関係を象徴的に描き表す場合もよくあることである。このことは、子供の絵本の中のお話として、動物の家族が人間の家族の代わりとして登場するようなものである。

課題画としての動物画は、レビューにより発表されているが、明確な資料は得がたい。保育園や小学校で、児童が動物を描くことはよくあることなのだが、それを課題画として心理学的検査のように扱った研究は殆んどない。わずかな資料として、扇田⁽⁸⁾は、自由画の分析の一項目としてとりあげていて、1. 猫や犬などの小動物を多く描くのは愛情欲求を示す。2. 一般に動物を多く描くのは愛情の欲求と内向的性格を示す。3. 猛獣を描くのは攻撃的傾向を示す。4. 画面に対して右向きに描くのは非社会的の徴候があり、一般に友人関係に問題がある。と述べている。

本研究では、数少ない動物画の心理学的資料を提供することを目指して動物画をとりあげた。一方、性格特性を知るためには、最もポピ

ュラーな性格テストである矢田部ギルフォード性格検査⁽¹⁴⁾ (児童用) を用いた。Y-G検査を全部施行すると時間がかかるので、一つの試みとして、Y-G検査の中の、5つの尺度を因子レベルでとらえ、社会的不適応性の因子を表す、O, Co, Agの尺度と、主導性の因子を表す、A, Sの尺度のみを選び用いた。この5つの尺度により、児童の集団適応度や社会性を見ていくことにした。動物画は課題画であるが、他の課題画、人物画や、樹木画、家屋画のように、題材の範囲が狭くなく、種々様々の動物が選べるわけであり、課題画といえどもかなりの自由度がある。動物の種類や、動物の数、大きさ、位置、色彩との関係、背景の描き方、など様々な分析の観点から動物画を分析し、児童の社会適応度、社会性との関係をみていくことにした。

目 的

児童に自分の好きな動物の絵を描かせ、それと並行して、矢田部ギルフォード性格検査(児童用)の一部を施行する。矢田部ギルフォード性格検査により、学校生活に於て重要な意味をもつ、児童の集団への適応度や社会性を調べ、それと、動物画の内容、すなわち、動物の種類、描かれた数、大きさ、位置、使用された色彩、描写のし方、色の塗り方、クレヨンの筆圧、背景、動物の向き、などとの関係を調べる。

方 法

1 被 験 者

金沢市内にある小学校2校の、2年生1クラス、3年生1クラス、4年生2クラスの児童、154名で表1のとおりである。とくに学校生活に極端な不適応を示す児童はいなかった。検査や描画は、全員協力的で、絵を描くことをいやがることはなく、スムーズに行われた。

2 施 行 日 時

2年生は、Y-G検査も描画も、ともに、1979年10月20日、3年生は、Y-G検査は担任の先生にインストラクターを代行してもらったの

表1 被験者の構成

学年	性別		計
	男子	女子	
2年生	23	20	43
3年生	16	17	33
4年生	42	36	78
計	81	73	154

で、1979年10月20日前後、描画は同年10月24日、4年生のクラスAは、Y-G検査も描画も、ともに、1979年10月20日、4年生のクラスBは、Y-G検査は担任の先生にインストラクターを代行してもらったので、1979年10月20日前後、描画は同年6月13日

3 性格検査用紙の作成

矢田部ギルフォード性格検査(Y-G性格検査)⁽⁷⁾⁽¹³⁾、小学2年～6年用から、因子水準で、集因適応や社会性に関係があると思える、5つの尺度を選んで、検査用紙を作成した。

イ 主導性 (Leadership) の因子として、

・A支配性 (Ascendance) 尺度

得点が高いと、率先して行い、積極的に参加する、社会的指導性、統率力があり、人をつかうことが上手である。得点が低いと、リーダーシップの資質に乏しく、服従的、消極的である。

・S社会的外向 (Social Extraversion) 尺度

得点が高いと、社会的、对人的接触を好み、社交性に豊み、口数多く、誰とでもすぐ親しくなれる。得点が低いと、引込み思案、恥ずかしがり、口数少なく、対人接触を避ける。

ロ 社会的不適応性 (Social Maladjustment) の因子として

・O客観性の欠如 (Lack of Objectivity) 尺度

得点が高いと、自己中心的で、神経過敏で、空想的、主観的である。また、実直さに欠け、あがり易い。得点が低いと、注意と関心を外界の全てのものに向けることが出来、状況にすぐ適応出来、現実的、客観的である。

・Co協調性の欠如 (Lack of Cooperative-

ness) 尺度

得点が高いと、不満が多く、人を信用しないといった現状否定的である。得点が低いと、協動的であり、現状肯定的である。

・Ag攻撃性 (Aggressiveness) 尺度

得点が高いと、愛想が悪く、攻撃的であり、短気で正義感がつよい、過度に活動的であり、情緒安定と結びつけば、社会的活動性となり、情緒不安定と結びつくと、社会的不適応となる。得点が低いと、愛想がよく、気が長く、妥協的であり、鈍重となる。

以上の5尺度を選び、それぞれの尺度について、各8問ずつ質問項目があるが、検査用紙を作成する際の不手際により、A尺度と、Ag尺度の各一問ずつを間違えたので、全体として、38項目の質問紙となった。

4 実施方法

2年生と、4年生クラスAについては、Y-G検査を施行した後、動物画を描いてもらった。3年生と、4年生クラスBについては、両検査を別の日に施行した。Y-G検査については、担任の先生にインストラクターを代行してもらった。

イ Y-G性格検査

検査用紙を児童に一部ずつ配り、「今から問題を読みますから、自分がそうだと思ったら、はいに丸をつけます。違うと思ったら、いいえに丸をつけて下さい。あまり迷わずに、自分の思う方に丸をつけて下さい。これはテストではありませんから気楽にやって下さい」と、教示を与え、練習問題を3題行った後、本検査を行った。設問は一問一問読みあげた。名前と丸をつけたことを確認してから提出してもらった。所要時間は約25分であった。

ロ 動物画

全員に、白色の八つ切り画用紙一枚と、クレヨン(ぺんてる12色)一箱ずつを与え、「好きな動物の絵を描いて下さい。絵の上手・下手は関係ありません」と教示した。この時

・実際に見たことのない動物でもよい

・下描きは自由(ただし、クレヨンで)

- ・背景は自由
- ・回りの人の真似をしてはいけない
- ・動物は一種類だけで、数は制限しない
- ・時間は40分

と、注意事項をつけ加えた。制限時間がきて、全員が絵をだいたい完成した事を確認した後、絵の裏に、名前、動物の種類、その動物を描いた理由、描いた絵の簡単な説明を書いてもらった。途中、インストラクター2名が机間巡視して、教示を繰り返したり、児童の質問に答えた。また、絵が自分の思うように描けない児童や、失敗した児童には、励ましの言葉をかける等、描画がスムーズに進行するよう気をつけた。

5 結果の整理

イ Y-G性格検査

各被験者の尺度ごとの得点を算出し、因子水準で検討するために、主導性因子尺度得点(L因子尺度得点とする)と、社会不適応性因子尺度得点(SM因子尺度得点とする)を求めた。L因子尺度得点は、A尺度とS尺度の得点の合計であり、0~15点の範囲である。SM因子尺度得点は、0尺度、Co尺度、Ag尺度の得点の合計であり、0~23点の範囲である。

次に、L因子尺度と、SM因子尺度について、それぞれ、男女別に、平均(\bar{X})と、標準偏差(σ)を求め($\bar{X} \pm \sigma$)の範囲の得点のものを、M群(Middle Group)とし、($\bar{X} + \sigma$)以上の範囲の得点を示すものを、H群(High Group)、($\bar{X} - \sigma$)以下の範囲の得点を示すものを、L群(Low Group)と、それぞれ、3群ずつにわけた。

ロ 動物画

動物画については、次の項目について分析した。

- ① 動物の種類
- ② 動物の数。1匹、2匹、3~5匹、6匹以上の4群にわけて整理した。半匹でも1匹とみなした。

③ 動物の描写。写実的か、漫画的か、または絵が未熟で判定し難いものの3群に分類した。

④ 動物の位置。画用紙のどの位置に動物が描いてあるか、全体にわたるもの、中央、上部、下部、右側、左側の6群に分類した。

⑤ 動物の大きさ。動物の画用紙上に占める面積(複数の場合は合計した面積)をみて、大、中、小の3群に分類した。

⑥ 全体の構成。絵全体のまとまりをみたもので、画用紙上のどの部分に描かれているか、全体、中央、上半、下半、右半、左半、ふちの7群に分類した。

⑦ 使用された色数。絵全体に使われた色数(動物も含む)。1~4色、5~9色、10~12色の3群に分類した。

⑧ 色の塗り方。丁寧、普通、雑の3群に分類した。

⑨ クレヨンの筆圧。クレヨンのタッチの強弱で、強い、普通、弱い3群に分類した。

⑩ 背景に描かれた太陽の有無。

⑪ 背景に描かれた雲の有無。

⑫ 背景に描かれた地面の有無。

⑬ 背景に描かれた木の有無。

⑭ 動物の向き。正面、左向き、右向き、混合の4群に分類した。

⑮ 動物が歯をむき出しているかどうか。口を開けているかどうか(歯は描かれていない)。

結果と考察

1 L因子尺度とSM因子尺度の得点を、154人のY-G検査の結果から算出し、男女別に、その平均値、及び、標準偏差を求め示したのが表2である。表2より、L因子尺度では、男女間に、 $P < 0.05$ の統計的有意差がみられた。それ故、女子の方が男子よりも主導性が高いといえる。また、SM因子尺度では、男女差はみられなかったが、男子の方が得点が高く、この両結果から、一般に、男子の方が社会的不適応度が高く、集団生活に消極的な傾向がみられる。男子と女子の得点がかかなり異なるし、後述するように描かれた動物画の内容もかなり違っているので、以後の結果については、一応、男女別々に分けてみていくことにする。

表2 各因子尺度の男女別の平均、標準偏差及びH群、M群、L群の得点範囲

***t 検定により $P < 0.05$

	性別	人数	平均	標準偏差	L 群	M 群	H 群
L 因子尺度	男子	81	8.69 ^{**}	3.17	0~5	6~11	12~15
	女子	73	9.88 ^{**}	2.67	0~7	8~12	13~15
SM因子尺度	男子	81	11.38	4.10	0~7	8~15	16~23
	女子	73	10.71	3.38	0~7	8~13	14~23

L因子尺度、SM因子尺度の各々について、平均値 (\bar{X}) と、標準偏差 (σ) から ($\bar{X} + \sigma$)、($\bar{X} - \sigma$) の値を求め、その結果から、H群、M群、L群の得点の範囲を、表2に示すように決定した。しかし、ここで、一つだけ原則からはずれたものがある。それは、女子のSM因子尺度の ($\bar{X} + \sigma$) の値は、14.09であり、得点14の者はM群に属するはずであるが、得点14の者をM群に属させると、H群の人数は9人となり、L群の人数17人と比べて、倍ほども人数が異なるし、一応2桁ほどの人数が望ましいので、L群の人数とのバランスを考慮に入れて、得点14の者7人をH群に属させた。その結果、L因子尺度、SM因子尺度それぞれの、H群、M群、L群の人数は表3に示すように決定した。

表3 各因子尺度におけるH群、M群、L群の人数

	L 因子尺度			SM 因子尺度		
	男子	女子	計	男子	女子	計
H 群	15	12	27	13	16	29
M 群	51	45	96	58	40	98
L 群	15	16	31	10	17	27
計	81	73	154	81	73	154

2 結果の整理の順序に従って、各被験者の動物画を分析して、各因子尺度ごとに、H群、M群、L群の3群において整理した。

表4、表5はそれぞれL因子尺度(主導性) SM因子尺度(社会不適応性)における、H群、M群、L群と、動物の種類との関係を表したものである。鳥の項目は、にわとり、白鳥、あほ

うどり、などのおとなしい鳥で、ひよこも含めている。また、猛禽類の項目は、はげたか、鷲などの肉食性の性質のはげしい鳥である。その他としては、男子では、狼(2名)、ラクダ(2名)、鯨(2名)、ねずみ(2名)、猿、チーター、牛、虎、豚、ワニ、亀、イルカ、魚、蟹(各1名)であり、女子では、金魚(2名)、狐(2名)、魚(1名)であった。

表4以降の表に於て、計の欄にある、*印、**印などは、 χ^2 -検定による、男女間の統計的有意差を示したものであるが、表4より、計の欄にある*印のある項目をみていくと、蛇、象、猛禽類、カバ、恐竜は、いずれも、男子のみによって描かれている。また、うさぎ、鳥、りす、パンダは、圧倒的に女子に多く、猫も女子に多い。犬、ライオンは、男女共に描かれていて有意差はないが、男子の方がより多い。このように、描かれている動物の種類は、男女により全くといっていいほど異っている。

表4より、主導性(Leadership)と動物の種類との関係をみると、男子では、猫を描いている者は、より主導性が高い者ほど多かった。また、蛇を描いている者は、より主導性が低い者ほど多い傾向がみられた(傾向検定による)。犬を描いた者も、主導性の低い者が多かった(χ^2 -検定による)。その他、統計的に有意ではないが、ライオンや馬は、どちらかといえば主導性の高い者に、象や、鳥や、カバや恐竜は、主導性の低い者により描かれている。

表5より、社会不適応性(Social Maladjustment)と動物の種類との関係をみると、男子では、カバや、恐竜を描く者には、社会的不適

表4 動物の種類とL因子尺度(主導性)の得点との関係

▲ 傾向検定 ▲ P<0.10 ▲▲ P<0.05 ▲▲▲ P<0.01
 *x²-検定 * P<0.10 ** P<0.05 ***P<0.01

()の中はパーセント

		う さ ぎ	鳥	犬	猫	蛇	ラ イ オ ン	象	り す	キ リ ン	猛 禽	カ バ	馬	ペ ン ギ ン	パ ン ダ	恐 竜	そ の 他	計
男 子	H	0 (0)	1 (7)	3 (20)	▲▲▲ 3 (20)	▲ 0 (0)	2 (13)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (7)	0 (6)	0 (0)	0 (0)	5 (33)	15 (100)
	M	1 (2)	2 (4)	4 (8)	▲▲▲ 1 (2)	▲ 8 (16)	4 (8)	6 (12)	0 (0)	2 (4)	4 (8)	2 (4)	1 (2)	1 (2)	0 (0)	3 (6)	12 (24)	51 (100)
	L	0 (0)	2 (13)	5 (33)	** 0 (0)	▲▲▲ 3 (20)	0 (0)	2 (13)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (7)	1 (7)	15 (100)
	計	1 (1)	5 (6)	12 (15)	4 (5)	▲ 11 (14)	6 (7)	8 (10)	0 (0)	2 (2)	4 (5)	3 (4)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	4 (5)	18 (22)	81 (100)
女 子	H	5 (42)	▲ 1 (8)	1 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	** 1 (8)	2 (17)	▲▲ 0 (0)	0 (0)	1 (8)	12 (100)
	M	15 (33)	7 (16)	▲ 1 (2)	* 8 (18)	0 (0)	2 (4)	0 (0)	5 (11)	2 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (2)	▲▲ 1 (2)	0 (0)	3 (7)	45 (100)
	L	5 (31)	5 (31)	▲ 3 (19)	** 1 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	▲▲ 0 (0)	0 (0)	1 (6)	16 (100)
	計	25 (34)	13 (18)	** 5 (7)	** 9 (12)	0 (0)	2 (3)	0 (0)	6 (8)	2 (3)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (3)	* 3 (4)	0 (0)	5 (7)	73 (100)
男女計		26 (17)	18 (12)	17 (11)	13 (8)	11 (7)	8 (5)	8 (5)	6 (4)	4 (3)	4 (3)	3 (2)	3 (2)	3 (2)	3 (2)	4 (3)	23 (15)	154 (100)

表5 動物の種類とSM因子尺度(社会不適応性)の得点との関係

▲ 傾向検定 ▲ P<0.10 ▲▲ P<0.05
 * x²-検定により P<0.10 ()の中はパーセント

		う さ ぎ	鳥	犬	猫	蛇	ラ イ オ ン	象	り す	キ リ ン	猛 禽	カ バ	馬	ペ ン ギ ン	パ ン ダ	恐 竜	そ の 他	計
男 子	H	0 (0)	0 (0)	2 (15)	1 (8)	3 (23)	0 (0)	1 (8)	0 (0)	0 (0)	1 (8)	▲▲ 2 (15)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	▲ 2 (15)	1 (8)	13 (100)
	M	1 (2)	4 (7)	8 (14)	3 (5)	6 (10)	5 (9)	5 (9)	0 (0)	2 (3)	3 (5)	▲▲ 1 (2)	2 (3)	1 (2)	0 (0)	2 (3)	▲ 15 (26)	58 (100)
	L	0 (0)	1 (10)	2 (20)	0 (0)	2 (20)	1 (10)	2 (20)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	▲ 2 (20)	10 (100)
女 子	H	4 (25)	5 (31)	0 (0)	2 (13)	0 (0)	1 (6)	0 (0)	2 (13)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (6)	0 (0)	1 (6)	16 (100)
	M	16 (40)	5 (13)	3 (8)	7 (18)	0 (0)	1 (2)	0 (0)	2 (5)	2 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (5)	1 (2)	0 (0)	1 (2)	40 (100)
	L	5 (29)	3 (18)	2 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (6)	* 0 (0)	1 (6)	0 (0)	3 (18)	17 (100)

応度のより高い者が多かった（傾向検定による）。また、有意ではないが、猫や猛禽類は社会的不適応度の低い者、即ち、社会的に適応度の高い者に描かれることはなかった。鳥や象は、どちらかといえば、社会的適応度の高い者に多くみられた。

女子によって多く描かれる猫を描いた男子が主導性が高いのは意外な結果であったが、描かれた絵をみると、男子によって描かれた猫の絵は、女子の描いた猫のように、かわいいものではなく、黒猫が歯をむき出しているような、猛獣的な感じのうける絵であって、同じ猫といっても、内容はかなり違っている。尺度別にみると、猫の絵を描いた者は、S得点が高くて外向的であって、猫の絵を描いた男子は、主導性が高く、積極的ではあるが、あまり社会的に適応的とは言えない。次に、蛇を描いた男子は、主導性が低くて、陰気で接触を避けるような蛇の陰惨なイメージと一致する。尺度別では、社会的に内向的で、服従的であり、攻撃的である。男子で蛇を描いた者が多かった理由としては、ある組で、ある児童の描いた蛇を見て真似をして描いた児童がいたためと考えられるし、また、児童の「描いた理由」についてみると、蛇の「描きやすい」ことが原因として考えられる。カバと恐竜は、社会的に不適応な者で主導性に欠ける者によって描かれ易い。カバのもつ怪物的イメージは、恐竜のイメージに近いものであり、これらの動物のもつ暗いイメージにあい通じるものである。一方、ライオンを描く男子は、社会的にも適応的で、主導性があり、尺度別にみると、支配性と客観性の得点が高く、社会性のある積極的な児童といえよう。象や鳥は、適応的だが、主導性に欠ける服従的な児童によって描かれ易い。

他方、表4、表5より、女子については、鳥を描く者は、主導性がより低い傾向がみられた。また、パンダを描く者は、より主導性が高かった（傾向検定による）。馬を描く者も主導性が高く、犬を描いた女子は、男子同様に主導性が低い者が多かった。また馬を描いた女子は1名

だが、社会的不適応度は低かった（ χ^2 -検定による）。鳥はどちらかといえば、社会的に不適応な女子によって描かれている。うさぎを描いた女子は非常に多く、うさぎのもつ、やさしい、親しみ易いイメージを反映してか、尺度別にみると、外向的であり、攻撃的でなく、うさぎのもつイメージと一致している。鳥を描いた女子は、服従的であり、主導性に欠けている。また男子ほど適応的ではなく攻撃性がみられる。犬は、男子、女子、双方に好んで描かれているが、男女共に、主導性が低く、どちらかといえば適応的である者が多く、犬のもつ従順な属性と一致している。

全般的にみて、描かれた動物の種類は、男女により非常に差異がみられ、その動物のもつ、文化的ステレオタイプとしてのイメージと、それを描いた児童の、社会性や適応性との間に、かなりの符合する点がみられる。

3 動物の数と、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表6である。男子の方が1匹を描き易く、女子の方が、多数、とくに6匹以上を描き易かった。傾向検定の結果は有意な結果は得られなかった。 χ^2 -検定の結果では、男子では、1匹を描いた者は主導性が低かった。女子では、3～5匹描いた者は主導性が高かった。また、6匹以上描いた女子は、社会的不適応度が高い者が多かった。

全般的にみると、男女共に、1匹だけ描いた者は、主導性は低く、3～5匹描いた者は、主導性の高い者が多かった。しかし、6匹以上の多くを描いた者は主導性が高いということにはなかった。また、社会不適応性についてみると、社会的に不適応度が高い者ほど6匹以上描く者が多くみられた。

4 描写のし方と、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表7である。男子の方が写実的に描き、女子の方がマンガ的に描くことがわかった。傾向検定の結果は、女子では、社会適応度の高い者ほど写実的に描くことがわかった。また、 χ^2 -検定の結果では、男子では、社会不適応性の高い者が、未熟な絵を描くこと、

表6 動物の数と、主導性、社会不適応性との関係

* χ^2 -検定 * $P < 0.10$ ** $P < 0.05$ *** $P < 0.01$
() の中はパーセント

		L 因子尺度					S M 因子尺度				
		1 匹	2 匹	3~5匹	6匹以上	計	1 匹	2 匹	3~5匹	6匹以上	計
男子	H	7 (47)	3 (20)	4 (27)	1 (7)	15 (100)	7 (57)	1 (8)	3 (23)	2 (15)	13 (100)
	M	18 (35)	13* (25)	13 (25)	7 (14)	51 (100)	27 (47)	13 (22)	12 (21)	6 (10)	58 (100)
	L	13*** (87)	0 (0)	2 (13)	0 (0)	15 (100)	4 (40)	2 (20)	4 (40)	0 (0)	10 (100)
	計	38 (47)	16 (20)	19 (23)	8 (10)	81 (100)	38 (47)	16 (20)	19 (22)	8 (11)	81 (100)
女子	H	3 (25)	2 (17)	7* (58)	0 (0)	12 (100)	2 (13)	4 (25)	4 (25)	6*** (38)	16 (100)
	M	8 (18)	13 (29)	11 (24)	13*** (29)	45 (100)	10 (25)	8 (20)	17 (43)	5 (13)	40 (100)
	L	5 (31)	3 (19)	7 (44)	1 (6)	16 (100)	4 (24)	6 (35)	4 (24)	3 (18)	17 (100)
	計	16 (22)	18 (25)	25 (34)	14 (19)	73 (100)	16 (22)	18 (25)	25 (34)	14 (19)	73 (100)

表7 描写のし方と、主導性、社会不適応性との関係

▲ 傾向検定により $P < 0.10$ () の中はパーセント
* χ^2 -検定 * $P < 0.10$ ** $P < 0.05$ *** $P < 0.01$

		L 因子尺度				S M 因子尺度			
		写實的	マンガ的	未熟	計	写實的	マンガ的	未熟	計
男子	H	9 (60)	4 (27)	2 (13)	15 (100)	6 (46)	1 (8)	6*** (46)	13 (100)
	M	32 (63)	6 (12)	13 (25)	51 (100)	38 (66)	11* (19)	9 (16)	58 (100)
	L	9 (60)	2 (13)	4 (27)	15 (100)	6 (60)	0 (0)	4 (40)	10 (100)
	計	50*** (62)	12 (15)	19 (23)	81 (100)	50 (62)	12 (15)	19 (23)	81 (100)
女子	H	5 (42)	3 (25)	4 (33)	12 (100)	4▲ (25)	10** (63)	2 (13)	16 (100)
	M	19 (42)	20 (44)	6 (13)	45 (100)	18▲ (45)	12 (30)	10* (25)	40 (100)
	L	8 (50)	5 (31)	3 (19)	16 (100)	10▲ (59)	6 (35)	1 (6)	17 (100)
	計	32 (44)	28*** (38)	13 (18)	73 (100)	32 (44)	28 (38)	13 (18)	73 (100)

女子では、社会不適応性の高い者が、マンガ的な絵を描くことがわかった。

全般的にみると、主導性との関係はあまりなく、写實的な絵を描く者は社会適応的であり、未熟、マンガ的な絵を描く者は、社会不適応度が高いことがわかった。

描写のし方という項目を設けたのは、マンガやイラストが氾濫している今の時代の反映ではあるが、マンガ的に描いた児童が予想外に多か

ったからである。本研究では、児童に自由に描かせようという意図から、「マンガ的に描いてよいか」という質問に対して、「よい」と答えた。⁽⁵⁾しかし、コピッツの人物画や、HTPテスト等では、⁽¹¹⁾「マンガ的に描かないように」というインストラクションを設けている。動物画の場合、こうしたインストラクションの制限項目を如何に扱うべきかは解らない。しかし、マンガ的な絵を許容した以上分析する必要がある。

表8 動物の位置と、主導性、社会不適応性との関係

▲ 傾向検定 ▲ P<0.10 ▲▲ P<0.05 ()の中はパーセント
* x²-検定 * P<0.10 *** P<0.01

		L 因子 尺度						S M 因子 尺度							
		全 体	中 央	上 半	下 半	左 側	右 側	計	全 体	中 央	上 半	下 半	左 側	右 側	計
男 子	H	6▲ (40)	6 (40)	0 (0)	1▲▲ (7)	2* (13)	0 (0)	15 (100)	6 (46)	4 (31)	1 (8)	2 (15)	0 (0)	0 (0)	13 (100)
	M	20▲ (39)	15 (29)	3 (6)	11▲▲ (22)	1 (2)	1 (2)	51 (100)	19 (33)	20 (34)	3 (5)	14 (24)	1 (2)	1 (2)	58 (100)
	L	2▲ (13)	5 (33)	1 (7)	6▲▲ (40)	1 (7)	0 (0)	15 (100)	3 (30)	2 (20)	0 (0)	2 (20)	3*** (30)	0 (0)	10 (100)
	計	28 (35)	26 (32)	4 (5)	18 (22)	4 (5)	1 (1)	81 (100)	28 (35)	26 (32)	4 (5)	18 (22)	4 (5)	1 (1)	81 (100)
女 子	H	4 (33)	4 (33)	1 (8)	2 (17)	1 (8)	0 (0)	12 (100)	7 (44)	4 (25)	0 (0)	2 (13)	1 (6)	2*** (13)	16 (100)
	M	22 (49)	12 (27)	0 (0)	8 (18)	2 (4)	1 (2)	45 (100)	19 (48)	9 (23)	2 (5)	8 (20)	2 (5)	0 (0)	40 (100)
	L	5 (31)	3 (19)	2* (13)	4 (25)	1 (6)	1 (6)	16 (100)	5 (29)	6 (35)	1 (6)	4 (24)	1 (6)	0 (0)	17 (100)
	計	31 (42)	19 (26)	3 (4)	14 (19)	4 (5)	2 (3)	73 (100)	31 (42)	19 (26)	3 (4)	14 (19)	4 (5)	2 (3)	73 (100)

5 動物の位置と、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表8である。動物の用紙上に於ける位置は、環境に対する自己支配、及び、意識統制の方向を表している。樹木画などでは、空間象徴が重要視されていて、上下左右のどの部分が強調されているかによって、被験者の自己像の見方が異ってくる。表8に示されるように、男女間の有意な差は全くなかった。傾向検定の結果は、男子では、全体に描く者は、より主導性が高く、下半分に描く者は、より主導性が低かった。また、x²-検定の結果では、左側に描く者は、主導性が高く、社会的適応度が高かった。また、女子では、上半分に描く者は主導性の低い者が多く、右側に描く者は社会不適応度が高かった。

全般的にみて、男女共に、全体や、中央、左側に描くの方が主導性が高く、上半分・下半分、右側に描くの方が主導性の低い者が多かった。社会適応度の点からいえば、左側に描く方が右側に描くよりも適応的であった。

全体や中央に描く方が、偏った位置に描くよりも、好ましい結果が出たことは、他の研究結果と一致するものであるが、扇田⁽⁸⁾によると、左側は、環境から逃げようとする内向性を示し、

右側の強調は、環境を破壊しようとする子に表れ易い。また、コッホは樹木画に於て、右側は、外向性、自信、自己拡大を表し、左側は、主観性、内向性、内面、過去、しりごみ等を象徴するものと見ている。こうした観点からみると、本研究の結果である、左側に描くの方が右側に描く者より主導性が高く、社会適応的であるというのは、これまでの他の研究の結果と一致していない。

しかし、動物の画用紙上に於ける位置ではなくて、全体の構成、即ち、動物以外のもの、太陽や雲や木や草などの背景をも含めた、全体の構成がどのような配置を占めるかを調べた結果、圧倒的に全体に及んでいるものが多い(男子77%、女子81%)のは言うまでもないが、傾向検定した結果では、男子では、全体の構成が全体に及ぶものは、主導性が高い者ほど有意に多くみられた。また、構成が主として下半分にあるものは、主導性の低い者ほど有意に多かった。また、全体の構成が中央にある者は、社会的不適応度の高い者ほど有意に多かった。そして、全体の構成がふちの方にある者は、社会不適応度の低い者ほど多かった。また、x²-検定の結果では、男子で構成が左側にある者は、主

表9

動物の大きさと、主導性、社会不適応性との関係

▲ 傾向検定により ▲▲ P<0.05 ()の中はパーセント
* x²-検定 * P<0.10 *** P<0.01

		L 因子 尺度				S M 因子 尺度			
		大	中	小	計	大	中	小	計
男 子	H	5 (33)	8 (53)	2 (13)	15 (100)	5 (38)	7 (54)	1 (8)	13 (100)
	M	9 (18)	36 (71)	6 (12)	51 (100)	11 (19)	39 (67)	8 (14)	58 (100)
	L	4 (27)	8 (53)	3 (20)	15 (100)	2 (20)	6 (60)	2 (20)	10 (100)
	計	18 (22)	52* (64)	11 (14)	81 (100)	18 (22)	52 (64)	11 (14)	81 (100)
女 子	H	4 (33)	7 (58)	1▲▲ (8)	12 (100)	5 (31)	6 (38)	5 (31)	16 (100)
	M	6 (13)	24 (53)	15▲▲ (33)	45 (100)	5 (13)	20 (50)	15 (38)	40 (100)
	L	3 (19)	6 (38)	7▲▲ (44)	16 (100)	3 (18)	11 (65)	3 (18)	17 (100)
	計	13 (18)	37 (51)	23*** (32)	73 (100)	13 (18)	37 (51)	23 (32)	73 (100)

導性の低い者が有意に多かった。女子では構成が右側にある者は、社会的不適応度が有意に高かった。男女間の差は、構成が下半分にある者が、男子の方で有意に多かった。このように、全体の構成を考えると、左側や下半分が強調されている者は、主導性が低いという結果であり、扇田やコッホの述べる所と一致している。

6 動物の大きさと、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表9である。大きさは、環境へのかかわりを示し、自尊心、自己拡大の欲求、活動性、感情を表すといわれている。普通サイズの絵は、これらが一応適応の状態にあることを表している。大きすぎる絵は、自己の存在を顕示的に主張したり、自己を拡張しようという欲求を強くもつ者や、環境からの圧力について心理的緊張が強く、怒りっぽい者に生じがちである。小さすぎる絵は、自分が環境に適応しておらず、小さい存在であると感じ、自分を抑制し、引きこもりがちの人にみられる。即ち、自尊心が低く、自分について無力感や、劣等感をもっていたり、不安が強く、恥ずかしがりやで活動性の低い人に多い。

表9より、男子の方が女子より、中サイズの者が有意に多く、女子の方が小の者が有意に多い。一般に、男子の方が女子より大きく描く傾

向がみられる。傾向検定の結果では、女子では、主導性の低い者ほど小さく描いている。これ以外に統計的に有意な結果は得られなかったが、傾向としては、男女共に、主導性の高い者の方が大きく描き、主導性の低い者の方が小さく描くようである。また、男子では、社会不適応度の高い者の方が大きく描く傾向が、わずかながら伺える。この結果は前述した、大きさについての仮説と一致するものである。

7 使用された色数と、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表10である。扇田は、色数が少ないのは感情的適応に欠け、しかも創造性がない、また、一色のみで描く場合は、精神的未発達や、情意不安定な子供、自閉性の子供にしばしば表れ易いと述べている。

表10より、傾向検定の結果、男女共に、色数の多い者は、より主導性が高い。また、男子の方が女子より色数の少ない者(1~4色)が多いのだが、男子では、色数の少ない者は、より社会不適応度が高い。

この結果は、例えば、ロールシャッハテストでも、色彩は、環境からの情緒的刺激に対する反応性を表しているという、色彩のもつ意味を裏づける結果である。即ち、感情の豊かな者は、色彩を多く用いる。積極性のある、主導性の高

表10 使用された色数と、主導性、社会不適応性との関係

▲ 傾向検定により P<0.10 () の中はパーセント
* x²-検定により P<0.10

		L 因子 尺度				S M 因子 尺度			
		1~4 (色)	5~9	10~12	計	1~4 (色)	5~9	10~12	計
男 子	H	4 (27)	8 (53)	3 ▲ (20)	15 (100)	5 ▲ (38)	7 (54)	1 (8)	13 (100)
	M	9 (18)	36 (71)	6 ▲ (12)	51 (100)	11 ▲ (19)	40 (69)	7 (12)	58 (100)
	L	4 (27)	11 (73)	0 ▲ (0)	15 (100)	1 ▲ (10)	8 (80)	1 (10)	10 (100)
	計	17* (21)	55 (68)	9 (11)	81 (100)	17 (21)	55 (68)	9 (11)	81 (100)
女 子	H	0 (0)	8 (67)	4 ▲ (33)	12 (100)	2 (13)	11 (69)	3 (19)	16 (100)
	M	5 (11)	33 (73)	7 ▲ (16)	45 (100)	4 (10)	31 (78)	5 (13)	40 (100)
	L	3 (19)	12 (75)	1 ▲ (6)	16 (100)	2 (12)	11 (65)	4 (24)	17 (100)
	計	8 (11)	53 (73)	12 (16)	73 (100)	8 (11)	53 (73)	12 (16)	73 (100)

表11 色の塗り方と、主導性、社会不適応性との関係

▲▲ 傾向検定により P<0.05 () の中はパーセント
* x²-検定 * P<0.10 ** P<0.05

		L 因子 尺度				S M 因子 尺度			
		丁寧	普通	雑	計	丁寧	普通	雑	計
男 子	H	4 (27)	3 (20)	8 (53)	15 (100)	3 (23)	5 (38)	5 (38)	13 (100)
	M	9 (18)	20 (39)	22 (43)	51 (100)	13 (22)	21 (36)	24 (41)	58 (100)
	L	4 (27)	6 (40)	5 (33)	15 (100)	1 (10)	3 (30)	6 (60)	10 (100)
	計	17 (21)	29 (36)	35* (43)	81 (100)	17 (21)	29 (36)	35 (43)	81 (100)
女 子	H	2 (17)	7 (58)	3 (25)	12 (100)	6 ▲▲ (38)	7 (44)	3 (19)	15 (100)
	M	7 (16)	25 (56)	13 (29)	45 (100)	6 ▲▲ (15)	22 (55)	12 (30)	40 (100)
	L	4 (25)	6 (38)	6 (38)	16 (100)	1 ▲▲ (6)	9 (53)	7 (41)	17 (100)
	計	13 (18)	38** (52)	22 (30)	73 (100)	13 (18)	38 (52)	22 (30)	73 (100)

い者ほど、色彩を多く使用しているわけである。また、色彩の少ない者ほど、情意不安定や、自閉的などの情緒的障害と関係しているわけであり、色彩の少ない者が、社会的に不適応度が高いというこの結果は、色彩のもつ意味を明確に検証している。

8 色の塗り方と、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表11である。傾向検定の結果では、女子で、丁寧に塗った者ほど、社会的

不適応度が高かった。この傾向は、男子でも、有意ではないがわずかながら見られ、男女共に、社会的不適応度が高いほど、丁寧に塗っていて、社会的適応度が高いほど、雑である。この解釈として、丁寧に塗りすぎるということが、強迫的な傾向、完全癖と結びつくのではないかと考えられる。即ち、何事もきちんとしないと気がすまない、丁寧に過ぎることが、物事への固執を強めて、社会的関心を低くしているとも考え

表12

筆圧と、主導性、社会不適応性との関係

▲ 傾向検定により P<0.10 ()の中はパーセント
* x²-検定 * P<0.10 ** P<0.05

		L 因子 尺度				S M 因子 尺度			
		強い	普通	弱い	計	強い	普通	弱い	計
男 子	H	3 (20)	7 (47)	5 (33)	15 (100)	2 (15)	6 (46)	5 (38)	13 (100)
	M	14 (27)	28 (55)	9 (18)	51 (100)	16 (28)	34 (59)	8 (14)	58 (100)
	L	2 (13)	9 (60)	4 (27)	15 (100)	1 (10)	4 (40)	5 (50)**	10 (100)
	計	19* (23)	44 (54)	18 (22)	81 (100)	19 (23)	44 (54)	18 (22)	81 (100)
女 子	H	1▲ (8)	9 (75)	2 (17)	12 (100)	4▲ (25)	9 (56)	3 (19)	16 (100)
	M	4▲ (9)	32 (71)	9 (20)	45 (100)	4▲ (10)	30 (75)	6 (15)	40 (100)
	L	4▲ (25)	8 (50)	4 (25)	16 (100)	1▲ (6)	10 (59)	6* (35)	17 (100)
	計	9 (12)	49 (67)	15 (21)	73 (100)	9 (12)	49 (67)	15 (21)	73 (100)

られる。しかしこれは、あくまでも一つの推測に他ならない。なお、雑に塗った者は、男子の方が女子より多かった。

9 筆圧(この場合は、クレヨンを塗るタッチの強さ)と、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表12である。描画の際の筆圧は、変化が少なく、ひとりひとりの被験者にとってほぼ一定しており、被験者のエネルギー水準を表わしている。筆圧は、強い筆圧と、適度の筆圧と、弱い筆圧に分けられ、パーソナリティーに歪みが少なく適応している人は、適度の筆圧によって描画するものである。一般に、強い筆圧の人は、エネルギー水準が高く、自己主張的かつ自信家であり、行動が積極的である。他方弱い筆圧で薄い線による描画は、エネルギー水準が低く、自分について無力感をもち、自信がなくて決断力に欠け、自分の存在を目立たないようにし、不安や抑うつ状態にある人に生じ易い。

表12より、男子の方が女子より筆圧の強い者が多い。これは、エネルギー水準の高い、活発で自己主張的な者が多いということであろう。傾向検定の結果では、女子では、筆圧の強い者は、より主導性が低く、より社会不適応度が高い。x²-検定の結果では、男女共に、筆圧の弱

い者が社会不適応度が低く適応的である。女子で筆圧の強い者が主導性が低いのは、前述した仮説と矛盾した結果である。しかし、筆跡学では、筆圧の弱い者は、そううつ気質の者にみられ易く、そううつ気質のもつ、对人的適応のよさを考慮すると、タッチの弱い方が社会的に適応的であるという結果は納得出来るものである。

10 太陽、雲、地面、木を描いたことと、主導性、社会不適応性との関係を表したのが表13である。コピッツは、HFD(人物画)に於て、太陽を描く者は、臨床的児童よりも適応した子供に多いと、また、精神身体医学的疾患をもつ特定の子供によって太陽が付加されると述べている。また、成績に関して、教師の評定の良い生徒の方が、悪い生徒よりも太陽を多く描くと述べている。太陽は一般に父親の象徴であり、両親の愛情と支持を反映し、支配的な大人の権威と関係していると言われている。

また、雲は、コピッツによると、精神身体医学上の疾患を有する不安傾向の強い子供のHFDに多くみられ、明らかに攻撃的な子供の絵には殆んど現れない。雲はロールシャッハテストの解釈の場合でも、不安の象徴であり、社会的な参加への意欲を欠き、逃避的依存的な意味をも

表13 太陽，雲，地面，木を描いたことと，主導性，社会不適応性との関係

▲▲▲ 傾向検定により P<0.01 ()の中はパーセント
* x²-検定 ** P<0.05 *** P<0.01

		L 因子 尺度				S M 因子 尺度					
		人数	太陽	雲	地面	木	人数	太陽	雲	地面	木
男 子	H	15	4 (27)	2 (13)	5 (33)	2 (13)	13	6 (46)	3 (23)	5 (38)	2 (15)
	M	51	18 (35)	8 (16)	20 (39)	20** (39)	58	17 (29)	7 (12)	22 (38)	19 (33)
	L	15	3 (20)	2 (13)	7 (47)	3 (20)	10	2 (20)	2 (20)	5 (50)	4 (40)
	計	81	25 (31)	12 (15)	32 (40)	25 (31)	81	25 (31)	12 (15)	32 (40)	25 (31)
女 子	H	12	3 (25)	1 (8)	6 (50)	0▲▲▲ (0)	16	4 (25)	3 (19)	12 (75)	6 (38)
	M	45	7 (16)	8 (18)	34 (76)	15▲▲▲ (33)	40	10 (25)	9 (23)	30 (75)	13 (33)
	L	16	7** (44)	5 (31)	12 (75)	10▲▲▲ (63)	17	3 (18)	2 (12)	10 (59)	6 (35)
	計	73	17 (23)	14 (19)	52*** (71)	25 (34)	73	17 (23)	14 (19)	52 (71)	25 (34)

つとされているように、雲は、他人に対して敢て攻撃しようせず、その代りに自分自身にその矛先を向ける子供に、成人、とくに両親によって脅かされている子供に現れ易いとされている。

基線や草については、目下、臨床的な意味を見出せない⁽⁵⁾とコピッツは述べている。

木は、ロールシャッハテストの場合では、女性性を表し、性的役割の不安定さを示すといわれている⁽⁹⁾。

表13より、傾向検定の結果では、女子で、木を描く者は、主導性がより低いという有意な結果がみられた。この傾向は男子でもわずかながらみられ、木が女性性や依存性を示すという、木のもつ意味を考慮すると、主導性の低い児童に現れ易いのは当然である。また、x²-検定の結果では、女子で太陽を描いた者は、主導性の低い者に多かった。また地面は、男子よりも女子によって有意に多く描かれている。有意な結果ではないが、雲は、主導性のより低い女子に多く描かれているし、地面は、主導性のより低い男子により多く描かれている。一般に、こうした背景を描かない方が、主導性が高いということが、わずかながら伺える。また、太陽は、社会的により不適応な男子により多く描かれて

いて、木は、社会的により適応的な男子により多く描かれている。

こうした背景の付加物については、どんな意味があるかということも大切であり、それは、なかなか確証出来難いものであるが、まだ、太陽をどんな風に描いているか、どんな木を描いているかによって、それぞれ、そのもつ意味も異ってくると思われる。それ故、一括して扱うことにもかなり問題があるといえよう。

11 動物の向きと、主導性，社会不適応性との関係を表したのが、表14である。人物画や樹木画の場合は、向きは殆んど問題にならないが、動物画では、大部分の者が横向きの動物を描くので、右向きか左向きかが1つの分析の項目としてとりあげる必要がある。表14に示したように、大部分の者が左向き（向って左向き）の動物を描いていて、右向きや正面向きの絵を描いた者は少ない。また、男女間に非常に差がみられ、男子の方が女子より、左向き、右向きの横向きの絵が有意に多く、女子の方が男子より、正面向き、混合（正面向き、左向き、右向き、後向きなどが二種類以上混合している）が有意に多い。傾向検定の結果、男子では、正面向きに描く者は、より主導性が高い。これは、女子でもわずかながらの傾向がみられるので、男女

表14

動物の向きと、主導性、社会不適応性との関係

▲ 傾向検定 ▲ P<0.10 ▲▲ P<0.05 ()の中はパーセント
* x²-検定 * P<0.10 ** P<0.05 *** P<0.01

		L 因子尺度					S M 因子尺度				
		左	右	正面	混合	計	左	右	正面	混合	計
男子	H	11 (73)	1 (7)	3 ▲▲ (20)	0 (0)	15 (100)	6 ▲ (46)	4 ** (31)	1 (8)	2 (15)	13 (100)
	M	32 (63)	6 (12)	2 ▲▲ (4)	11 *** (22)	51 (100)	41 ▲ (71)	5 (9)	4 (7)	8 (14)	58 (100)
	L	12 (80)	3 (20)	0 ▲▲ (0)	0 (0)	15 (100)	8 ▲ (80)	1 (10)	0 (0)	1 (10)	10 (100)
	計	55 ** (68)	10 *** (12)	5 (6)	11 (14)	81 (100)	55 (68)	10 (12)	5 (6)	11 (14)	81 (100)
女子	H	7 (58)	0 (0)	3 (25)	2 (17)	12 (100)	4 ▲▲ (25)	1 (6)	4 (25)	7 (44)	16 (100)
	M	21 (47)	1 (2)	7 (16)	16 (36)	45 (100)	22 ▲▲ (55)	0 (0)	4 (10)	14 (35)	40 (100)
	L	8 (50)	0 (0)	1 (6)	7 (44)	16 (100)	10 ▲▲ (59)	0 (0)	3 (18)	4 (24)	17 (100)
	計	36 (49)	1 (1)	11 * (15)	25 *** (34)	73 (100)	36 (49)	1 (1)	11 (15)	25 (34)	73 (100)

共に言えることである。また、男女共に、左向きの動物を描く者はより社会適応的である。これと符合する結果として、x²-検定の結果、男子では、右向きに描く者は、社会的不適応度の高い者が多かった。

一般的にみて、正面向きの絵を描くものは、より主導性が高く、右向きや混合の者は、より主導性が低い傾向にある。また、左向きの絵を描く者は、より社会適応的であり、右向きや正面向き、混合の絵を描く者は、より社会的不適応度が高い。これは扇田の述べる所(問題でとりあげてある)と一致するものでもあり、大部分の者が左向きを描くという、集団への一致度(group conformity)としてもとらえられる。

12 口を開けている、歯をむき出している動物を描いたことと、主導性、社会不適応性との関係を表したのが、表15である。傾向検定の結果、女子では、口を開けている動物を描いた者は、より主導性が高い傾向がみられた。男子でも、歯をむき出している動物を描いた者は、わずかながら主導性の高い傾向がみられる。社会不適応性との関係では、男女共に、歯をむき出している動物を描いた者は、社会不適応度が高いか、平均的であり、社会適応的ではなかった。歯をむき出す絵は、普通一般に、口唇攻撃性

(oral aggression) の表現だとされている。鳥や蛇では歯が描けないので、口を開けているのもこれに準ずるのではないかと考えられる。攻撃性の高い子供が、より主導性が高く、幾分社会不適応的であるのは納得出来る結果である。ちなみに、攻撃性(aggression)の尺度の得点について、歯をむき出した絵を描いた児童の得点

表15 口を開けている、歯をむき出している動物を描いたことと、主導性、社会不適応性との関係

▲ 傾向検定により P<0.10 ()の中はパーセント

		L 因子尺度			S M 因子尺度		
		人数	口を開けている	歯をむき出している	人数	口を開けている	歯をむき出している
男子	H	15	4 (27)	3 (20)	13	6 (46)	1 (8)
	M	51	17 (33)	4 (8)	58	14 (24)	7 (12)
	L	15	2 (13)	1 (7)	10	3 (30)	0 (0)
計	81	23 (28)	8 (10)	81	23 (28)	8 (10)	
女子	H	12	4 ▲ (33)	0 (0)	16	4 (25)	1 (6)
	M	45	10 ▲ (22)	3 (7)	40	7 (18)	2 (5)
	L	16	1 ▲ (6)	0 (0)	17	4 (24)	0 (0)
計	73	15 (21)	3 (4)	73	15 (21)	3 (4)	

をみても、男子では、4.9（全体の平均が4.2）であり、女子では、4.0（全体の平均が4.3）であって、男子では、歯をむき出した絵を描いた児童は幾分攻撃的であるといえる。

13 これ以外の動物画の分析の観点として、動物に使用された色彩の数、全体の色調、動物の表情、動物の姿勢、絵の全体のもつ雰囲気、動物が何をしているか、省略している部位、動物の身体部位のアンバランス、等考えられるが、これらは、今回は省略した。

分析の観点の中で最も重要性をもつのは、動物の種類であり、描く動物の種類によって他の描画要素も規定される面がある。例えば、恐竜のようなものは、どうしても1匹か2匹になり易いし、かなりの大きさを占めるようになりがちである。

動物画において、自由に選択された動物は、被験者の自己像を表しているかどうかについては、梅本ら⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾によるIMQ (Image Question) による自己像の分析の結果と、選択された動物の種類がかなり異っているので、自己像を表しているとは考えない方がよいと思う。どうしてその動物を描いたのかという理由を書いてもらった結果をみると、男子では、かわいいから(21%)、強いから(19%)、好きだから(12%)、かき易いから(11%)、面白いから(9%)、飼っている、飼っていたから(7%)、などが主な理由であり、女子では、かわいいから(48%)が圧倒的に多く、好きだから(23%)、描き易いから(9%)、きれいだから(4%)などが主な理由である。

動物の種類と描いた理由との関係を見ると、「うさぎ」では26人のうち、かわいい(16.5人)、好き(3.5人)描き易い(2人)であり、「鳥」では18人のうち、かわいい(4.5人)好き(4.5人)飼っている(3人)、「犬」では17人のうち、かわいい(7.5人)、好き(2人)、強い(2人)、描き易い(3人)、よく知っている(2人)、「猫」では13人のうち、好き(5人)、かわいい(2人)、飼っている(4人)、と、これらの女子によって描かれ易いペット的小動物

では、かわいいとか好きとかの理由が圧倒的に多い。また、「りす」も、6人のうち5人が、かわいいをあげており、「パンダ」も3人全てが、かわいいからと答えている。他方、「蛇」では11人のうち、強い(4人)、かわいい(2人)、描き易い(2人)であり、「ライオン」では8人のうち、大きい(1.5人)、かわいい(2人)、強い(1人)、「恐竜」では4人のうち、強い(1人)、好き(2人)となっている。ペット的ではないこれらの動物は男子によって描かれ易く、女子が、「かわいい」、「好き」という理由に対して、「強い」という理由が特徴的である。しかし、男子でも、「かわいい」という理由の者がかなりあり、現代っ子の「かわいいらしさ」の指向のようなものが伺える。

14 本研究の方法全般に対する問題点を考察してみると

(1) 「周りの人の絵の真似をしないように」という教示にもかかわらず、どうしても真似していると思われる絵が何組かある。これは、さて、動物を描くようにと言われても、即座に何を描いていいのかわからないという困惑を示す児童がどうしても出てくるからである。集団法で実施する場合は、よほど机の間隔を開けるようにしないと、この問題点を防ぐことは難しい。個別法でする方が望ましいのだが、時間がかかりすぎる欠点がある。また、真似をした子供どうし、同一視のメカニズムにより、似かよったパーソナリティーをもつ面もあると考えられるから、必ずしもこれを否定出来ない面もある。

(2) 動物画とY-G検査を施行した日時が異なるクラスがある。動物画を描いた時のパーソナリティーを問題にするわけだから、なるべく接近した間隔で施行するのが望ましいと思う。

(3) 児童のパーソナリティーのうち、社会適応度、社会性という面だけをとりあげたが、絵の分析の観点から言えば、全般的なパーソナリティーとの関係をみた方がより好ましかったと思える。つまり、Ag, Co, Oという社会不適応性の因子尺度には、とりあげられていない、D, C, I, Nという情緒不安定性の尺度との

関係が大きな意味をもっているし、また、A、Sという主導性の因子尺度には、R、G、Tという活動性の尺度との関係を見おとすべきではないと考えられるからである。

(4) クラスにより、Y-G検査の中の、L因子尺度の得点が異っていること、男子ではとくに大きな差があり、女子でも少し差がある。この差は学年により、得点が漸次、増加するか、減少するかという傾向がみられるわけではなく、クラスによって、得点が有意差をもって、非常に異っていることである。それ故、H群、L群の被験者が特定のクラスに片寄るといふ傾向が出て来ている。クラスにより、活発なクラスや、おとなしいクラスがあることは、現実とその雰囲気で解るとおりであり、この点から言えば、もう少し多くのクラスを被験者として扱うべきであったと反省される。

(5) 分析のし方に於て、描写、動物の大きさ、塗り方、筆圧などの項目は、客観的な判定基準があいまいであり、かなり主観的判断に基づいている。この点の基準をもっと明確にして、より客観的にとり扱えるようにすべきであった。動物画の分析の資料は他に殆んどないので、本研究が試行的なものであることは言うまでもない。

動物画による児童の性格分析は、人物画や、樹木画、家族画、家屋画などのように体系化されてはいない。いわば自由画の一環として、テーマを動物という、かなり自由度の高い領域に限ったものとみてもよい。「どんな動物を、どんな風に描くか」ということが分析の観点になる。投影法として描画をみる場合は、被験者の欲求や情緒がどの程度表出されているかが問題となるのであるが、この点に於ては、人物画を描かせる場合よりも、より防衛が少なくなるとも考えられる。ただ描かれた動物像が、被験者の自己像を表すものではないとすると、その動物像は、一体何を表しているかということになり、たまたま、動物を主題にしたということに

なって、別の課題でもいいということになる。ロールシャッハテストでは、動物は、より原始的(primitive)、本能的なものを表しているという解釈がなされているし、反応された動物の種類によって、被験者の対人関係の投影をそこにみることも出来るわけである。しかし課題画としての動物画を被験者のより原始的な自己像を表明しているという理論の裏づけはない。ただ、子供は動物を好んで描くというだけの理由がみられるのみである。そうした理論的な裏づけは今後の研究に期待して、本研究では、動物画の分析の資料が殆んどないことに注目して、分析の先駆的な試みとしてとりあげたものである。こうした資料の積み重ねが必要とされ、そこから児童の絵の分析の様々な理論が見出され得ることを希求しているわけである。「こんな絵を描いたから、この児童はこうだ」という、直接に、絵と性格を結びつけることは非常に危険であり、描画法は、人格診断の補助的な資料になりうるものであり、主たる資料とするには、あまりその理論的裏づけが希薄なのである。守屋⁽⁶⁾が述べるように、子供のパーソナリティー診断に際しては、その兆候、フェノタイプ(顕形)ではなくて、その動機、原因、すなわち、ゲノタイプ(原型)を探知することが必要だと思われる。絵による診断は、まさに、その点をねらっているものである。

本研究に御協力頂きました。十一屋小学校、金沢大学教育学部附属小学校の諸先生方及び、被験者となって熱心に絵を描いてくれた154名の児童生徒の皆様へ心からお礼申し上げます。

参 考 文 献

- ① 浅利 篤：児童画の秘密 黎明書房 1956.
- ② 岩原信九郎：ノンパラメトリック法 日本文化科学社 1955.
- ③ 小林重雄：DAMグッドイナフ人物画知能検査ハンドブック 三京房 1977.

- ④ Koch, C.: The Tree Test, (Der Baumtest), Hans Huber, 1952. 林勝造他訳：バウム・テスト——樹木画による人格診断法—— 日本文化科学社 1970.
- ⑤ Koppitz, E, M.: Psychological Evaluation of Children's Human Figure Drawings, Grune & Stratton Inc, 1968, 古賀行義監訳：子どもの人物画——その心理学的評価—— 建帛社 1971.
- ⑥ 守屋光雄：児童画による性格形成——診断と治療—— 中野佐三編 児童画と性格 81～126 児童心理選書2 金子書房 1957.
- ⑦ 中井節雄：人事検査法 85～99 竹井機器工業株式会社
- ⑧ 扇田博元：絵による児童診断法 黎明書房 1958
- ⑨ Phillips, L. & Smith, J. G.: Rorschach Interpretation, Advanced Technique, Grune & Stratton, 1953.
- ⑩ 霜田静志：児童画の心理と教育 金子書房 1960
- ⑪ 高橋雅春：描画テスト入門——HTPテスト—— 文教書院 1974.
- ⑫ 高橋雅春：ロールシャッハ解釈法 牧書店 1964
- ⑬ 辻岡美延：新性格検査法——Y-G性格検査実施応用 研究手引—— 竹井機器工業株式会社 1965
- ⑭ 辻岡美延, 安藤照子, 園原太郎：Y-G性格検査用紙(小学2年～6年生用) 日本・心理テスト研究所
- ⑮ 梅本堯夫, 河合隼雄, 斉藤久美子, 出井淑子, 岡田康伸, 山上雅子：IMQによる自己像把握のこころみ ——(2)動物像による分析—— 日本心理学会第33回大会発表論文集 1969.
- ⑯ 梅本堯夫, 河合隼雄, 斉藤久美子, 出井淑子, 岡田康伸：IMQにおける反応語の分析(I) 日本教育心理学会12回総会発表論文集 1970.
- ⑰ 湯川尚文：絵をかく子ども 誠文堂新光社 1974